

## Stephen Crane の 芸 術

——彼の創作活動における「経験」の意義について——

嶋 忠 正

(一)

Stephen Crane (1871-1900) が、1893年に兄の William に千ドル都合してもらって自費出版した処女作 *Maggie: A Girl of the Streets* (1896年公刊) は、それによって Crane が、Zola の自然主義をアメリカ文学の中に導入した先駆者のひとりと考えられるにいたった点で、彼の作家的性格を決定する重要なモーメントを作った記念すべき作品である。Crane を、アメリカの自然主義文学を代表する作家のひとりに数えることには異存はないが、彼の自然主義は、しかしながら、いわゆる ゴラ主義 (Zolaism) とは、かなり性質の異なったものであることを念頭におくことが必要であろう。第一に、Crane が、彼のいわゆる自然主義的な手法をものにする上で、フランスの自然主義、とくに Zola の作風から決定的な影響をうけたとか、あるいは *Maggie* から、両者に似通った個所をいくつか取り出して、この作品が Zola の *L'Assommoir* (1877) のアメリカ版だときめつけてみても、それは、けっきょく、単なる憶測の範囲を出ないのである。というのは、Crane が *Maggie* を着想する前に Zola の作品を読んでいたという確証は、どこにもないからである。

Crane の作家的性格や作品の傾向を決定する上で、最も目立った影響力とし

て作用した因子と考えられるのは、Hamlin Garland (1860-1940) と William Dean Howells (1837-1920) の両先輩作家から、直接間接にこうむった影響や感化であろう。Garland は、すでに1891年以來、Crane とは知己の間柄であったし、Howells とは、*Maggie* が奇縁となって、紹介の勞をとってくれた Garland を通じ、交渉がもたれるようになった。そして、Crane が嫉妬や中傷の種にされるほど、一躍して、文壇の寵児に祭り上げられることになったのも、ひとえに、この二人の著名作家の個人的激励と忠告と援助のたまものであったといっても過言ではないのである。Howells といえば、その当時の文壇の 'dean' 的存在であり、彼のひと声は、一無名作家の前途を左右することができるほどの千金の重みをもっていたのであるが、幸い Crane は、処女作 *Maggie* について、1894年4月15日付の *New York Press* 誌上に、“The Greatest Living American Writer (=Howells) called it (=Maggie) a remarkable book.”<sup>(1)</sup> といった推賞の言葉をもっているから、たとえ売れ行きはよくなかったにしても、幸先よきスタートを切ったというべきであろう。しかし、より重要なことは、この二人の先輩作家の影響が、単にそのような激励や援助といった副次的な面にとどまらず、Crane 自身進んで、彼らの作品や評論が自己の趣向にかなうものとして積極的に熟読吟味し、すでに Howells の realism や Garland の veritism にも明るく、十分に咀嚼そしゃくしていたということであろう。だから、Crane としては、すでに洗礼をうけていた自然主義的手法を、大都市ニューヨークに、いや、アメリカのあらゆる新興都市にみられる社会構造の欠陥を象徴するものとして、彼が最も深い関心を示していたスラム街に、適用しさえすればよかったのである。ちなみに、Garland が *Crumbling Idols* (1894) の中で理論的展開を行なっている、いわゆる 'veritism' を、不徹底ながら実証しようとした短篇集 *Main-Travelled Roads* が出版されたのは、Crane が Garland の realism に関する講演を、たまたま取材したことが動機となって彼と

知り合うようになった1891年のことであり、Howells がニューヨークにおける貧富と善悪の問題を大胆に取りあげた最初の作品 *A Hazard of New Fortunes* は1890年に、彼の評論集 *Criticism and Fiction* が1891年に、それぞれ出版されていることを考え合わせるならば、この辺の事情がいっそうよく理解できるであろう。

Crane には、上に述べたように、芸術上のよき指導者が二人もいたことが、彼の作風を決定する要因となったことはいなめないと思われる。が、さらにそれと相まって、社会人として身につけた、高度な観察と真実を要求する reporter という最初の職業から、作家になってからもついに自分を断ち切ることができなかった伝記的事実に照らしても、彼が自然主義的傾向を自己の体質に合ったものとして、つとに、はぐくんできたことが十分に察しられるであろう。ともかく、彼が作家としていただいていた芸術理論は、“truth and sincerity” という、Garland や Howells をはじめ、彼の友人でもあった Joseph Conrad, Henry James などがすでに強調した芸術家の条件を身をもって確認することにほかならず、彼の作品は、はからずもまた、そういう彼の信念を裏書きするものであったとすることができるだろう。ある意味においては、Crane ほど異常なまでに執拗に、激しい情熱を傾けて自分が追求せんとするテーマに食いきがり、まっこうから現実の対象にぶつかって、直接得た生々しい体験の蓄積と、それを創作活動の源として、高度な芸術性に支えられた作品の創造に、文字どおり寝食を忘れ、自己の健康をかえりみなかった作家は、アメリカ文学の中でも、Ambrose Bierce とか Thomas Wolfe など一部の作家を除いては、むしろ希有な存在であると考えられる。

けれども、ここに Crane の創作過程にみられる特異な現象として注目すべきことは、彼の場合、主義としては、個人の実験経験を作品の基礎とすべしとする Garland の ‘veritism’ があるけれども、その実践にあたっては、しばし

ば想像的経験が実際経験に先行していると思われるときがあることである。創作活動の場において、すでに作家の思想とか情緒にまで消化されている実際経験と、それを基礎にして展開される想像的経験とを厳密に区別することは困難であろうが、それが Crane の場合、すくなくとも、取り扱っているテーマに、その描かんとする対象に、想像力のかぎりをつくし、自己を芸術的に燃焼させることによって、そこに、実際の個人的体験をくぐった場合と等価値の、あるいは、それ以上に真に迫った reality に到達していると思われることがあるのである。それが、彼の心理的リアリズムといわれるものの性格であり、そこに印象主義作家としての彼の本領を発揮する場があったと考えられる。

## (二)

まず、Crane の処女作 *Maggie* について、その創作の過程を検討してみよう。この作品は、“An Experiment in Misery” などと同様、作者がニューヨークのスラム街 Bowery 地区を探訪し、そこにたむろする社会の底辺に住む人々の生活や、売春婦の生態などを実地に観察することによって生まれた semi-documentary な作品だとされ、そこに Crane の面目を求めようとするのが普通になっている。ところが、彼の伝記的要素に照らして、*Maggie* の創作過程を綿密に調べてみると、必ずしも実際体験から、この作品のすべてが生まれたとは言いきれないのである。Crane が、果たして、いつごろから *Maggie* の筆をとりはじめたのか、なにも確かなことは言えないが、おそらく、それは、彼がまだシラキュース大学に在学していた1891年の4月もしくは5月ごろからであろうと考えられている。つまり、Crane は *Maggie* をシラキュース大学在学中に書きはじめ、同年の12月に兄のいた New Jersey 州 Lake View で一応脱稿のはこびになったものを、さらに1892年の3月に第一回目の修正を行

ない、引き続き1892年から1893年の冬の間に、四度目の書き直しをすませている。<sup>(2)</sup> Crane のような健筆家が、*Maggie* にかぎり、その原稿を完成するのに、このように足掛け三年の歳月を費したことは、むしろ珍しい現象といわねばならない。これによっても、彼がこの処女作に作家の成否をかけ、絶大なる期待をよせていたことがわかるのである。ところで、もしもこの作品の創作が行なわれた時期の設定が上述のごとくであったとすれば、*Maggie* の背景になっているバワリー街の原型は、まずシラキュースの町の湖岸通りのスラム街の観察から生まれたということになるのである。<sup>(3)</sup> そして、それを、1891年に *Maggie* の執筆と並行して行なったニューヨークへの、すくなくとも二回にわたる旅行の際に、旅先で実地にバワリー街を観察した結果得た材料によって、原稿を補正しながら筆を進めたものと考えられる。この点について Stallman が

Crane of course knew the Bowery intimately and had considerable experiences with prostitutes, but not until he had written one or two drafts of *Maggie*.<sup>(4)</sup>

と解釈を下しているのは、ほぼ間違いのないところであると思われる。

1892年以後 Crane は、シラキュース大学を半年あまりで見切りをつけ、待望のニューヨークの檜舞台に乗り出し、いよいよ大都会での一無名作家としての苦悩の生活をはじめののだが、1892年から1893年の冬にかけて、再三 *Maggie* の原稿に手を加えている事実は、いったい何を物語るのであろうか？ 思うに、それは、彼が実際にバワリー界隈のスラムに住むどん底社会の人達と、親しく運命をわかち合うことによって得た、実際体験から割り出された自然主義的な視点と、彼ら不幸な人々に対する同情を基調にした純粹に人間的な情感がこれまでの単なる想像本位の *Maggie* の原稿に飽き足りない気持をおこさせ、再三原稿を補正することを、余儀なくしたのであろう。例えば、*Maggie* の Chap. XVI の終わりに近く、*Maggie* が通りで行きずりに会ったシルク・ハ

ットをかぶり、品のよい黒い外とうに身を包んだ慈悲心と温情の権化 (a picture of benevolence and kind-heartedness) のような男に話しかけるくだりを描いた一節などは、行間ににじみ出ている作者の情感が迫ってくるような気がする。

But as the girl timidly accosted him he made a convulsive movement and saved his respectability by a vigorous side-step. He did not risk it to save a soul. For how was he to know that there was a soul before him that needed saving?

人の魂を救うために自分の体面を賭けることもできない、神の恩寵を口にするえせ紳士を一つのモデルにして、“— the root of Bowery life is a sort of cowardice.”<sup>(5)</sup>と、救いのないスラム街の人々の意気地なさ、社会悪の真の根源を求めようとした Crane の真意を汲み取ることができるように思われる。あるいは、Chap. XVII の “The varied sounds of life, made joyous by distance and seeming unapproachableness, came faintly and died away to a silence.” という結末の文章をもつ最後の部分は、すでに死を決意している Maggie の暗澹とした心には全然触れずに、周囲の、彼女の心とは不釣り合いな歓楽の夜のざわめきや、運河の ‘deadly black’ な色や、どこかの工場が放つ ‘yellow glare’ が、河に放置してある木材を洗う油ぎった波を一瞬浮かびあがらせるといった、不吉な color symbols を伴う冷酷な環境と対比させながら、しかも見事に、この薄幸な女性の、死いがいに救いのない暗黒の世界を印象させているのであるが、そこには、「泥沼に咲いた可憐な花」たる Maggie が、Nana 的な女性ではけっしてなく、最後まで精神的純潔さと罪の意識を持ち続けた清浄な女性として描こうとしている、この作者のロマンチックともいえる倫理的姿勢を看取することができるように思われる。Crane の関心は、このように、彼の作品の中でも最も自然主義的色彩の濃い作品においてさえ、暴露的

な写実を通して社会悪の根源を突こうとする自然主義の立場より、薄幸の乙女 Maggie が置かれた社会環境が人間に及ぼす精神的ないし心理的影響に、たえず注がれているのであり、それがむしろ、この作品の本質をなしているときえ言えるのである。そして Crane は、そういう自己の特質を、しばしば詩的情感に富んだ symbols を用い、あるいは allegory や paradox の形をとって印象させようとするのである。ここに、われわれは、彼の文学が realism の方向をたどりながら、平板で、無味乾燥な naturalism の型にはまることなく、impressionistic realism とか symbolic realism とかいわれる陰影と色彩を添えているゆえんがあると思うのであるが、それはまた、裏返せば、自然主義文学としての彼の作品のもつ限界でもあるということができよう。それはともかくとして、彼の作品がもつ以上述べたような特質は、直接的体験によるよりも、創造的想像に訴えることによって、一層その本領を発揮することができる性質のものであるだけに、そこに、理論と実践の矛盾からくる duality に落ち込まざるを得なかった、あまりにも良心的な作家 Crane の不断の焦燥があったものと考えられる。

### (三)

Maggie に続く Crane の最大傑作 *The Red Badge of Courage* (1895) は、その創作の過程について、この辺の事情を一層明瞭に物語るものであろう。この作品は、南北戦争という、アメリカのような大国が北と南に対立して、兄弟かきにせめいだ大規模な内乱をテーマに取りあげた、アメリカ文学としては、この種文学の劈頭を飾るにふさわしい本格的な戦争小説であるが、そういう大きな歴史的背景をもった大事件をテーマとする作品に、わずか 22, 3 歳の若輩の Crane が取り組んで、それを珠玉の名篇に完成しおおせたことは、まった

く驚嘆に価する偉業である。しかも、それを Crane は、1893年の3月ごろから書きはじめ、翌年の夏じぶんにはすでに脱稿の運びになっていたというから、その神速ぶりには、作家の常規を逸したのがある。それはともかくとして、自然主義作家が作品のテーマとして、人間社会にみられる種々の暴力的現象を選ぶのが本命であるとするれば、戦争はその最たるものであり、その意味においても、この作品が第一次大戦後のアメリカ文学、ことに、この種の文学の一大流行をみた Lost Generation 期の作家たちに与えた影響を過小評価することはできないであろう。しかしながら、この重大な意味をもつ作品が、戦争について何の経験も持たない若い一介の無名作家によって、しかもきわめて偶然のなりゆきから書かれたのであるから、驚くほかはない。この点は、Lost Generation の作家たち、とくに *A Farewell to Arms* (1929) の著者 Hemingway などとは根本的に違っているところである。

*The Red Badge* が書かれた1893年を中心とする3年間は、Crane にとって、精神的にも物質的にも最もきびしい苦悩の時期であった。Garland の 'realism' に関する講演に刺激され、作家志望に野心をもやし、シラキュース大学を中退までして、ニューヨークの檜舞台に乗り出したものの、大都会の生活は、彼のような無名作家には、ことのほかきびしいものがあつた。ことに、ニューヨークでの生活の主たる収入源であつた *New York Tribune* の、いわゆる 'stringer' としての仕事が、たまたま1892年に彼が書いた報道記事があまりにも扇情的だということで、おりから副大統領選挙に出馬していた、同誌の経営者で編集主幹の Whitelaw Reid の反感をかい、結局お払い箱になってからは、彼の生活はことに悲惨をきわめた。兄や友人たちをたずねては借金したりその世話をうけたり、ほとんど 'sponger' 同然の生活に甘んじ、かろうじて餓死をまぬがれている有様であつたと想像される。とりわけ、せつかく兄に工面してもらって自費出版にこぎつけた *Maggie* が、彼の期待を裏切つて、さつ



ぱり売れなかったことは、大きな心の痛手だった。そのころの彼の下宿の部屋には、売れないままの書物がうず高く積まれ、いすがわりにされていたというから、この処女作の不評からうけた精神的打撃は察するにあまりある。けれども Crane は、このような苦境にあえぎながらも、Garland と Howells からうけた助言や激励が、この上もない貴重な精神的 drive になって、創作の意欲は、逆境にさからって、むしろ激しく燃えていたにちがいない。このことは、短篇集“Sullivan County Sketches” (1892) を series ものとして発表し、“An Experiment in Misery”, “An Experiment in Luxury” (ともに1894年出版) を刊行するかたわら、詩作に手をそめたり、さらに *Maggie* と同じ「パワリー物語」として *George's Mother* (1896) の原稿に筆をつけたり、きわめて活発な創作活動を行なっていることから、十分に推察できるのである。このような事情のもとにあって、*The Red Badge* の起稿は、もともと Crane が *Maggie* の不成功を挽回し、財政的逼迫を打開するための ‘potboiler’ として創作に乗り出した作品という出発をもつものであった。

さて、*The Red Badge* の創作にあたって、Crane は、*Maggie* のときよりも一層積極的に、幅の広い資料の収集を行なっている。*Maggie* の場合、素材は、アメリカの飛躍的な近代産業主義への脱皮がもたらした人間社会のひずみという形で、作家の観察の目を待っていたが、これに反し、*The Red Badge* は過去の出来事を扱う historical novel であり、Crane としては、南北戦争に従軍した経験をもつ veterans の口を通して、間接に戦闘を経験するか、さもなくば、南北戦争に関する記録や作品のたぐいを渉猟するいがいに方法はなかった。このようなわけで Crane は、*The Red Badge* の稿を進めるにあたって、1892年の冬から翌年の春にかけての、きわめて短い期間ではあったが、積極的に資料集めに奔走した。それも記録による資料の収集は、主として、友人で挿絵画家の Corwin K. Linson のアトリエの一隅を占めている、ぎっし

りつまった書棚から得たものであった。そのころのある日、たまたま Crane は、*The Battles and Leaders of the Civil War* の一巻を読みあさっていたのであるが、突然その書物を投げ出して、次のように Linson にさげんだという。

“I wonder that *some* of these fellows don't tell how they *felt* in those scraps! They spout eternally of what they *did*, but they are as emotionless as rocks!”<sup>(6)</sup>

この言葉は、彼がやがて出版する運命にある *The Red Badge* の性格を、ひいては、後年彼がになうことになるアメリカ文学における重要な作家としての性格を、いみじくも予言したのものとして興味をもたれるのである。もちろん、全部で四巻からなる膨大な記録 *The Battles and Leaders* は、ほとんどすべてが実戦に参加したベテランたちが執筆したものであり、南北戦争に関する記録としては、きわめて貴重な歴史的価値をもった文献である。従って Crane のこの言葉は、この書物の documentary な価値を否定したり、執筆者を攻撃しての軽率な発言だと受け取るべきではないだろう。彼が意味したのは、単なるルポルタージュと芸術作品の根本的な質的相違に関してであり、いかに正確であっても、単なる事実の記録では芸術作品たり得ないという信念をあらためて確認するとともに、自分の *The Red Badge* の未来像についての自戒の言葉と考えるのが至当であろう。

Crane が資料をあさった書物として、ほかに普通引き合いに出されるものをすこし次に紹介しよう。まず本国アメリカのものとして、Wilbur F. Hinman, *Corporal Si Klegg and His 'Pard'* (1887); Joseph Kirkland, *The Captain of Company K* (1891); Murford, *The Coward: A Novel of Society and the Field in 1863* (1863); Armstrong, *Red-Tape and Pigeon-Hole Generals* (1864)<sup>(7)</sup> など、いろいろと南北戦争ものが候補にのぼ

っているが、果たして Crane がそれらの書物を読んでいたという確証すらないのである。また他方、Crane が *The Red Badge* を書くにあたって、外国の戦争文学からうけたと考えられる影響が、あれやこれやとせんさくされている。まず、この種の source book の筆頭にくるのが、Tolstoy の *War and Peace* (1865-72)、とくにその Sebastopol の激戦、ついで Zola の *La Débâcle* (1892) があげられる。批評家によっては、もしも Tolstoy が *Sebastopol* を書かなかったならば、Crane の *The Red Badge* はこの世に存在しなかったであろうとまできめつける Tolstoy 絶対説が出て<sup>(8)</sup>いる。だが、すべてこうした意見は、けっきょくのところで、*Maggie* がその直接の影響として、Zola の *L'Assommoir* を生みの親ときめてかかるのと同様、単なる憶測の域を脱しない、せんさく好きな批評家のひとりよがりだと考えるのが、むしろ穏当であろう。もちろん、Crane がこれら的大陸の大作家の作品、とくに彼らの戦争文学に翻訳を通して接していた事実がないわけではないが、Crane は Zola の統計的リアリズムに鼻持ちがならなかったし、同様に Tolstoy のパノラマ式手法をも、退屈で、わずらわしいと思っていたのも事実である。彼らの文体は、しょせん、簡潔を旨とし、印象や象徴を尊ぶ Crane の文体とは膚が合<sup>(9)</sup>わなかったのである。

従って、あえて *The Red Badge* がこうむった直接間接の影響の跡を求めるのであれば、外国文学よりも、まだしもアメリカ本国の source のほうが確率が高いように思われる。すでに述べたごとく、*The Battles and Leaders* から多くの恩恵をうけたことは、Corwin Linson という確かな証人がいるから、ほとんど疑う余地がないところであろう。それ以外にも、Crane は、例えば、Chancellorsville の作戦計画に手腕を示した兄の William をはじめとする、南北戦争の古つわものたちの口から直接体験談を聞くことによって、書物などより、より実感に近いものを得ることができたのである。こういうヴェテラン

たちの中でも、最も深い影響を Crane に与えた人物としてあげられるのは、1888年に彼がまだニューヨーク州の Claverack の The Hudson River Institute に在学していたころの歴史の教師 General John B. Van Petten であろう。この人は、元来従軍牧師であったが、いくたの戦闘に参加し、目立った働きをした実績をかわれて、佐官に昇進、除隊時には准将の位にまで出世したひとであった。彼は、Fair Oaks, Antietam, Winchester などの戦闘の花々しい体験を、個人的実感として Crane に物語り、*The Battles and Leaders* に欠けていた生々しい心理的、感情的陰影を作品に盛る上に大いに役立った。とくに、*The Red Badge* の中に取り入れられている戦闘の場面のいくつかは、彼の助言に負うところが甚大であったとされている<sup>(9)</sup>。そのほか、Crane がこの同じ Institute に在学中に関係していた四個中隊からなる Claverack's student battalions の image が、作中のいわゆる 'blue demonstration' の原型だとか、Crane の言葉を引き合いに出して、彼が戦闘の実感に近いものを蹴球競技場でいつも経験していたとする説など、批評家はあらゆる可能性を引き出して、*The Red Badge* 誕生にまつわる因果関係を明らかにしようとしているが、そういうせんさくが複雑多岐にわたるほど、かえって目標から遠ざかっていくようなことになりかねないだろう。思うに、この作品誕生の真の過程は、Crane が、物どころがついてから実際に作品の原稿に筆をそめた時点までに蓄積した経験の総体と、南北戦争をはじめ、その他戦争一般について、彼が *The Red Badge* 創作のために意識的に収集した知識の総体が、彼の作家的特質(文体)を媒介として芸術的に創造されたものというほかないであろう。

#### (四)

Crane が作家の 'fidelity to the felt truth of his vision'<sup>(10)</sup> をいかに重要

視していたかは、すでに引用した Corwin Linson のアトリエでの彼の言葉にも、十分にうかがい知ることができるであろう。彼の念頭にあった *The Red Badge* の構想は、いつ、どこで、どういう戦闘が行なわれたかというルポルタージュ中心の作品ではなく、人間の生命をおびやかす最も怖るべき暴力の象徴としての戦争が人間の心におよぼす影響の詳細を、Fleming という一兵卒の心的映像を通して、印象させようとするのが主たるねらいであったと考えられる。彼にとっては、作品の中で扱う戦争が南北戦争という特定の戦争でなければならぬ決定的な理由はさらになく、アメリカ的背景をもつものならば独立戦争でも、米英戦争でもよかったはずである。彼は、ただ戦争という巨大な暴力の猛威を前にして、様々な反応を示す人間の心理の深層にまで探りを入れ、そこに展開する複雑な世界を一つの現実として追求することに目標をおいていたと言えるのである。このことは、作者が最初この作品のタイトルを“Private Fleming His Various Battles” とつける予定であったものを、現在のような彼が意図する作品の内容にふさわしい表題<sup>(4)</sup>に変更した事実、および登場人物をできるだけ名前と呼ぶのをやめ、‘the youth’, ‘the tall soldier’, ‘the loud soldier’ といった呼称を用いることによって、時間と空間を超越した普遍的な性格を作品に付与しようとしたことなど考え合わせると、一層明瞭に理解できるであろう。要するに、Crane は、戦争をば指揮官や將軍の視点ではなく、大規模な戦争という怪物に操られる無名戦士たちの視点から、‘how they felt’ という内面の世界を掘りさげ、解剖することによって、単なる実戦の記録などではとうていなしとげることができないような、リアルな戦争文学を作りあげること成功したというべきであろう。戦争の恐怖、ひいては死に対して示す人間の反応を、例えば、作中のっぼの兵士 Jim Conklin が眼前にひかえた死に対して示す印象的な反応 (Chap. IX) や、Fleming が戦闘の恐怖にわれを忘れ、敵に後ろを見せて遁走し、たまたま迷い込んだ森の中で、実感として経

験する恐怖の種々相、「若木さえ、風にシューシュー鳴って、彼の所在を世間に知らせようとする」(The swishing saplings tried to make known his presence to the world.) といった戦闘の恐怖と、そこから逃げ出した罪の意識に責めさいなまれる混乱した精神状態とか、森林中の chapel のイメージ、さらには、そこで会う死者とその死体の目の辺りに群がる蟻といった恐怖の形象でつまっている Chap. VII など、その一例にすぎないが、このように鮮明な迫力をもって人間の深層心理を浮き彫りにしてみせる巧妙さは、やはり Crane の印象主義の作家としての非凡な才能を物語るものであろう。この意味においても、戦争文学としてこの作品がもつ価値、その普遍的意義は、二十世紀後半の、すでに二つの世界大戦をくぐり抜けた今日感覚からしても、りっぱに通じる新鮮さをもっているといえるのである。

以上述べてきたことからすでに明らかのごとく、Crane は創作にあたって、作者の想像的創造力の働きを重要視するけれども、その反面、作家の実際の体験が軽視されたかというに、けっしてそうではない。スポーツ、ことにフットボールの試合で、

“I believe that I got my sense of conflict on the football field, or else fighting is a hereditary instinct, and I wrote intuitively; for the Cranes were a family of fighters in the old days, and in the Revolution every member did his duty.”<sup>(4)</sup>

などと実戦の経験のない自己を弁解しているが、たとえ、それによって戦闘に似た迫力を実感することができたとしても、‘fidelity to life’ を信条とする作家的良心からすれば、読者をあざむく欺瞞手段としか映らない。ここに自己を厳しく律する芸術家としての Crane の苦悩があったと考えられる。1895年から1898年にいたる彼の伝記が物語っているごとく、Crane は新進作家のはなやかな名声を満喫するいとまもないまま、この短い年月の間に、主として報道

記者として、彼は目まぐるしく海外へ移動しているが、彼をこのような激しい行動へ駆り立てたのは、*The Red Badge* の創作にあたって、彼に欠けていた実際の体験をいち早く積んで、作品の裏付けを行ないたいというもだしがたい願望が重大な動機になっていたものと考えられる。ちなみにこの時期における彼の主要な行動を年代順に追ってみると、まず 1895年には、Bacheller Syndicate の求めにより、2月から3月にかけて、彼は報道のため南西部およびメキシコへ出かけた。同年10月に出版することができた *The Red Badge* は、この取材旅行の途中、ニュー・オーリンズで最後の推敲を行なったものである。1896年の11月には、キューバの動乱を報道する目的で、Bacheller から派遣され、ニューヨークを出発、便船をまつためフロリダ州の Jacksonville におもむいた。そして新年早々、Commodore 号に便乗、出港したが、はからずもこの時、かの名短篇 “The Open Boat” 創作のきっかけとなったフロリダ沖での遭難事故にあった。さらに、1897年の4月から5月にかけて、*New York Journal* と *Westminster Gazette* の特派員として、Greco-Turkish War の報道記事を書くため、のちに彼の内縁の妻の座についた Cora Taylor (その時の変名は Imogene Carter) を女流記者に仕立てて、ギリシアに出かけた。ついで1898年4月25日、時の大統領 McKinley がスペインに対し宣戦を布告するや、Crane は、こんどこそ本当の戦闘を存分に観察できると信じ、矢も楯もたまらず、Cora を残して英国から急遽ニューヨークにまいもどり、早速海軍に志願したが、不運にも入隊を許可されなかった。彼は、そのころすでに、かなり重い開放性肺結核におかされていたのである。そこで彼は、やむなく記者でがまんすることにし、*New York World* と *New York Journal* の特派員という資格で、戦乱のキューバへおもむいた。この取材旅行ではじめて年来の宿願がかなって、彼は海兵隊の将兵たちとともに Guantanamo, Cuzco, Las Guasimas, San Juan Hill などの激烈な戦闘に参加し、思う存分に実戦を体

験することができた。上記両誌に19篇ずつ、合計38の至急報を送ったのは、この時のことである。ところが不幸にして、同年の7月に遂に病にたおれ、本国に送還されたが、Crane は病魔に屈することなく、再び *Journal* に報道記事を書くため、戦雲を求めて Puerto Rico へ、さらに Havana へと潜入した。この取材旅行中に、いちじ彼からの音信がとだえ、9月いっぱい彼のゆくえが知れなかったのが、死んだという噂がながれたが、実は誤報であることがわかった。しかし彼は、病氣と疲労が重なって体の衰弱がはなはだしく、1898年の暮れ近く、本国へ送還された。

以上1895年から98年までの、Crane の reporter としての活動の跡をたどったのであるが、彼のそのような行動のめまぐるしさから浮かんでくるイメージは、シラキューズ大学で野球の正選手として catcher と shortstop をやったスポーツマンとしての、どこまでも健康で、はつらつとした面影だけである。けれども、彼のこういう短兵急な行動への衝動には、健康な普通人のものというより、むしろ狂信者のそれのように、なにか異様に張りつめた、病的なものがひそんでいたように感じられる。そこには、眼前に迫る死の影をたえず意識しながら、許された今日の命を二倍にも、三倍にもして、がむしゃらに生き抜こうとする強烈な意志の力が働いていたような気がする。そして、そういう意志の力は、単に行動の面にとどまらず、むしろ内面の世界（想像の世界）において、いっそう激しく活動していたように思われる。廃疾のために制約された命を、内的世界において、いっそうのびのびと充実した内容をもって生きようと思いがっていたに違いない。そして、このような激しい内的生命の躍動が生まれる直接の動機は、彼としてはどこまでも reporter の任務に徹することが、同時に作家の生命とする実際体験を蓄積することにほかならず、またそうすることによってはじめて、芸術的創造の要素である想像の炎をたえず盛んに燃やし続けることが可能となるとの確信が、彼の根底にあったからにはほかならないと考



えられる。Crane にとって、*Maggie* や “An Experiment in Misery”, “An Experiment in Luxury” といった作品を書くためには、素材を求めて、わざわざバワリー街の売春宿でいく晩もすごし、売春婦の生態を膚をもって感じ取ることが絶対に必要な条件であった。<sup>(6)</sup> また、*The Red Badge* の場合は、最初から想像の産物という傾向が強かっただけに、かえって自己の作品を個人的体験のまないたの上のせてみる必要に迫られたのだと思われる。彼が1897年に、Cora Taylor を伴って、Greco-Turkish War の取材にギリシアにわたったことはすでに述べたが、4月17日に開始されたこの戦争は、5月20日にはすでにギリシア側の降伏によって終わりを告げ、Crane はあまり実戦らしい場面には出くわすことができなかったが、それでも “The roll of musketry fire was tremendous. In the distance it sounded like the tearing of a cloth.”<sup>(7)</sup> というような実感は感得することができた。彼はこのときの経験に照らして、“*The Red Badge* is all right.” との確信を得たのであるが、彼のこの言葉の裏には、経験の不在を深く恥じていた彼の精神的苦悩から、やっと解放された安心感を感取することができるであろう。

### (五)

最後に、その創作の過程について、*The Red Badge* とは全く対照的な立場にある “The Open Boat” (1897) を検討してみよう。この短篇は、Hemingway が深い感銘を受けた “The Blue Hotel” などとともに、Crane に、アメリカ文学史の中でも屈指の短篇作家としての地位を与えた作品であるが、この短篇にかぎって、すでに取りあげた二つの作品と異なり、実際の、それも出版に先立つ、わずか5カ月余り前に、彼の身にふりかかった遭難事件という生々しい体験に基づいて書かれたものである。この事件の顛末は、ややもすると神

話的な要素が加わって real Crane と mystical Crane の区別もさだかでない<sup>(9)</sup>彼の生涯のうちで、おそらく最も明瞭な部分をなしていると思われる。というのは、この海難救助はトップ記事として、いち早くアメリカの各新聞に報道されたばかりでなく、Crane 自身救助されてから4日後の1月6日付で、フロリダ州の Jacksonville の現地から *New York Press* あてに記事を送り、詳細に遭難の様子を報告しているからである。Crane の記事、およびその他の新聞にのった報道記事を総合してみると、キューバ向けの武器、弾薬を満載した引き船 *Commodore* 号が Jacksonville を出港したのは1896年12月31日(木)の夜のことであったが、その夜は、ことのほか霧がふかく、船は2マイルも行かぬうちに、St. Johns 河の泥の中に船首を埋めて航行不能となった。翌1月1日(金)の夜明けに、やっと税関監視船 *Boutwell* 号に、泥中より救い出されたが、さらに河口付近で、もう一度船は河床の砂地にのりあげた。が、こんどは自力ではい出し、ようやく海上に出ることができた。ところが海は荒れ模様で、船の動揺がはげしく、夜に入っても海上は静まる気配もなく、睡眠をとることさえ、ろくにできない有様であった。おまけに、夜中の3時ごろから、不運にも、船は機関室から浸水しはじめ、あまつさえポンプが故障して使用不能となった。バケツで水をかいたす作業に多数狩り出されたが、そのかいもなく、遂に船は、2日(土)午前7時ごろ、Mosquito Inlet の北東18マイルのところで沈没してしまった。沈没に先立ち、いわゆる 'ten-foot dinghy' で母船より離脱できたのは Captain Murphy と Crane, cook の C. M. Montgomery と oiler の Billy Higgins の4名(一説には5名)<sup>(10)</sup>であった。彼らは、"an open boat for thirty hours" の言葉通り、怒濤さかまく荒海で悪戦苦闘のすえ、やっと九死に一生を得、Daytona の海岸に泳ぎつき救助されたが、Higgins だけはボートが転覆し投げ出されたとき、大波にのまれ溺死した。救助されたのは3日(日)の早朝のことであった。

こうした各新聞紙上にをにぎあわせた遭難に関する報道のうちでも、勇敢な犠牲者のひとりであった Crane 自身が *New York Press* に寄せたものが、白眉の記事であることはもちろんであり、その軽快、洒脱な筆致は、そこに宿る humor と satire のひらめきとともに、それがすでに、単なる reportage 以上の価値をもつ、りっぱな一つの作品であり、その文体や精神において、Mark Twain に直接結びつく性質が顕著であり、とくに、テーマ的な類似もあって、この報道記事を読んでいると、まるで Mark Twain の *The Innocents Abroad* (1869) における Quaker City 号出港のくだりを読んでいるような錯覚におちいるほどである。けれども残念なことには、Crane のこの記事は、Commodore 号が Jacksonville を出港してからフロリダ沖で沈没するまでの航行の記録や船内の模様を詳細にたどっているけれども、肝心の荒海での漂流の部分は 30行足らずで、ごくあっさりとかたづけられている。そして、その断りとして

For my part I would prefer to tell the story at once, because from it would shine the splendid manhood of Captain Edward Murphy and of William Higgins, the oiler, but let it suffice at this time to say that when we were swamped in the surf and making the best of our way toward the shore the captain gave orders amid the wildness of the breakers as clearly as if he had been on the quarter deck of a battleship.<sup>(8)</sup>

と述べて、Commodore 号沈没から救助されるまでのいきさつを、やがて発表する意図をほのめかしている。

従って、同じ年の 6 月に出版された “The Open Boat” はその時の口約を果たしたものと、彼の新聞用の遭難記事の続篇だともみることができよう。登場人物も背景も時間的経過も、要するに構想のすべてが事実と一致し、その点だけでは、この短篇は明らかに作者自身の体験に忠実な、厳密な写実小説の

体裁を整えているということができよう。が、果たして、その文体の点ではどうであろうか？ 作品の性格を決定づける文体的特徴という面から考えれば、“The Open Boat” は “None of them knew the colour of the sky.” という風変わりな書き出しではじまる最初の文章から、“—the wind brought the sound of the great sea’s voice to the men on the shore, and they felt that they could then be interpreters.” という意味深長な最後の文にいたるまで、単なる言葉の伝達し得る範囲をこえた深遠な意味を暗示し、印象させる不思議な力をもった含蓄のある、適切な symbols の配列の上になりたつ、一つの allegorical な物語だということができよう。しかも、それらの symbols は、*The Red Badge* におけるごとく、作者の想像上の産物などではなく、実際の、生のままの体験のレットルを張ったものであるだけに、一層の迫力をもって読者の心に訴えてくるのである。この点でこの短篇は、Hemingway の同様なテーマを扱い、人間の不撓不屈の精神を謳歌した不朽の名作 *The Old Man and the Sea* (1952) の場合よりも、寓意性が現実のヴェールの中に隠されているために、それだけよりすぐれているときえいえるのである。われわれは、この物語の中に、人生という荒海の中で、同じ境遇の者が相寄り相助けて、超人的な勇気と忍耐力を発揮し、現実の暴力に執拗に抵抗し、遂に苦闘に耐えぬいて、勝利の栄冠をかちとった人達の尊厳なドラマをみることもできるだろう。そして、そういう人間のドラマは、“a ten-foot dinghy” を一つのとりでとし、それを取り巻き、容赦なく大波を送ってよこす荒海と、それに木の葉のように翻弄される小船をあやつる人間との間の死闘と、そんなものに対してあまりにも無関心で、冷酷な外界の事象との symbolical な対比のうちに、一層鮮明な映像を伴って展開されていくのである。小舟の中の彼ら四人の人間には、大波の一つ一つが “the final outburst of the ocean, the last effort of the grim water” とも思われ、翼を持っているというだけで荒海から安全に守ら

れ、“comfortably”にヒョイヒョイ小舟のそばを飛んでいる“Canton-flannel gulls”は羨望的であり、またそのために、その鳥が“black beadlike eyes”で、彼らをまばたきひとつせずにはせんさくしている様子に、“somehow gruesome and ominous”なものを感じ、激しい憤りを覚えずにはいられないのである。彼らには、はるかかなたに細い線のように見える陸地の、救いにくる気配もない、ひとけのない海岸にそそり立つ“a tall white windmill”が、さながら“a giant, standing with its back to the plight of the ants”のごとく見え、彼らを取り巻く「自然」が“indifferent, flatly indifferent”とも思われるのである。

この作品は、打ち寄せる大波と、それを乗り切ろうと、細い2本のオールに運命を託して、必死の力をふりしぼる人間たちの果てしない苦闘の繰り返しという、テーマ的には、一見きわめて単調で、何のへんてつもない状況の中で、まるで読者のひとりひとりに、オールを握る当事者のひとりであるような感じをいだかせずにはおかない緊迫感を、最後まで持続させるのに成功しているといえるのである。思うに、こういう緊迫感を読者に強要するのは、要するに、生命にかかわる切迫した状況におかれた人間は、生命の確保に全神経を集中させ、そのためにちょっとした状勢の変化にも敏感に反応し、一喜一憂という形で、大きな精神的影響をうけるものであるが、そういう状況下にある人間が示す心理的現象を、あるいは恐怖からくる混乱という形で、あるいは協調から生まれる美しい朋友愛とか、あるいはこのような運命に余儀なくされたことに対する自棄的なものろいとか、絶望とか希望とか、この意味では、平和な生活を楽しんでいる人たちには到底味わうことのできない複雑で多様な内的世界を、作者がたくみに浮彫りして見せてくれるからにはほかならない。しかも作者 Crane は、この遭難の体験者としての自己を、新聞記者として登場人物の中に加えながら、彼をひとりの客観的存在として捉え、完全な detachment の立場から、

その客体としての自己に遭難者の刹那刹那の実感を物語らせているのである。Crane は、こういう立場を取ることによって、dinghy 中の四人を客観的にながめることができただけでなく、さらに重要なことには、6 フィートの小舟の中の microcosm を、彼らを待つ運命とか、彼らを取り巻く自然といった、遭難者各自の意識には全然のぼらない macrocosm の中に取り入れることができたのである。一見、新奇ともみえる “None of them knew the colour of the sky.” という冒頭の文句や、物語の最初の部分で、給油係が手にするオールについて、“It was a thin little oar, and it seemed often ready to snap.” と述べて、物語の最後の部分でおとずれる彼の突然の死<sup>(6)</sup>という運命を予言しておく結構の周到さは、このような純粹客観の立場に立ってはじめて可能となるものだと考えられる。そして、物語の最後の部分で、救助された男たちが、夜の浜辺に立ったとき、

—the white waves paced to and fro in the moonlight, and the wind brought the sound of the great sea’s voice to the men on the shore, and they felt that they could then be interpreters.

という結末の文句は、“—she (=nature, 見方によっては「神」ともうけとれる) was indifferent, flatly indifferent.” ということの具体的な帰結であり、勇猛、果敢で、忍耐力ひとにすぐれる人間にかえって死がおとずれるという運命の皮肉に対する作者の嘲笑でもあるのである。

Crane は “The Open Boat” を仕上げるのに、遭難より5日後の1月7日に出した報道記事の一部として同時的に発表せず、そこに5カ月の猶予期間において6月に出版したが、それは、混乱した感覚が受け止めた、このあまりにも生々しい複雑な経験内容を客観的にながめ、整理し、それに秩序を与え、芸術的に再現するためには、どうしても冷却期間が必要だったのであろう。言いかえると、彼の場合、現実の体験は絶対に必要な創作の条件ではあっても、そ

の単なる写実的な、外面的な記録だけでは、彼の志向する芸術性に支えられた作品は生まれてこないという自覚があったからにはほかならない。彼のこういう創作の態度は、必然的にそのうちに、自己の作品を普遍的なレベルに引きあげようとする意図をふくんでいる。つまり、彼の鋭い観察眼と感受性が指向されるのは、現実の具体的な事象から生まれてくる感覚的内容にほかならず、現実の世界は、そういう感覚を誘発する契機としての意義をもつにすぎない。この点、経験した感情より、むしろそれを生んだ現実の具体的な事象に定着しようとする Hemingway の手法とは、いわば逆の方向を取っているといえるのである。Crane の作品が、全体として、具体的な場所や時間の設定が loose であり、時として意味の曖昧さや混乱をきたすことがあるのも、実は、そのあまりに感性を重んじ、印象のあくなき追求に走りすぎた結果にほかならないと思われる。自己の作品を時空を超越した普遍的な作品にしたいという意識は、“The Open Boat” においても、遭難者の身元が完全にわかっているにもかかわらず、できるかぎり、彼らの名前を使用せず、‘the correspondent’, ‘the captain’, ‘the oiler’, ‘the cook’ といった呼称を用いているところからも明らかに察しられよう。こういう呼称の使用は、*The Red Badge* の場合と軌を一にしたものであるが、この二つの代表作は、作品の性格や結構において、すこぶる似通った要素をたぶんにもっている。color symbols をふくめて、おびただしい symbols の使用、希望と絶望、明と暗、生と死というコントラストを中心とした構成、印象を主体とした特異な文体などがそれである。また、内容的にも、強固な意志と忍耐と勇気をもっていた給油係の Higgins の皮肉な死は、戦闘が恐ろしくて逃げ出した臆病者の Eleming が、皮肉にも勝利の栄冠をかちとり、勇猛果敢な Jim Conklin があえない最期をとげる筋と照応し、*The Red Badge* における戦場は、ここでは自然の暴力としての荒海に置きかえられているにすぎない。

## (六)

以上、Crane の作品の中でも代表作といわれる三つの作品を取りあげ、それがいずれも、Crane が志向する印象主義の傾向の強い心理的リアリズムの性格をもつものであることを述べ、それを前提として、彼の創作活動の場における現実の体験と、想像的体験の関係を中心に論を進めてきたのである。理論的に言えば、作家が芸術作品の中で、創造して表現する経験、すなわち創造的経験は、それより前に現実的に、あるいは想像的に獲得した経験を母体として生まれてくるものであり、その場合、その母体は作家のうちに思想とか情緒という形をとって存在しているものであると定義づけることができるであろう。従って、このような定義からすれば、Crane の場合、彼の創作活動の場における創造的経験は、① *Maggie* のように、現実的経験と想像的経験が、ほとんど同時に作用しあい、補いあって作品が生まれてきたと思われる場合と、② *The Red Badge* におけるごとく、明らかに現実の経験が不在のまま、想像的経験（もちろん、彼の思想とか情緒に、さらに資料の収集によって得た知識が、加わってその母体となっているのであるが）が中心となって創作活動が行なわれ、作品出版後に、その想像的経験の真偽の裏付けという形で、現実の経験がつまれたと考えられる場合と、さらに③ “*The Open Boat*” のごとく、生々しい形で受け止められた現実的経験が現実に存在しながらも、それを中心とせず、なお想像的経験によって、それを芸術的に補正し、調整し、はじめて創造的経験という形をとったと考えられる場合があるのである。そして、これを結果的にみるならば、Crane のような印象主義的な作家にあっては、現実的経験の有無にあまりかかわりなく、想像的経験の占める割合がひじょうに高度であるために、*The Red Badge* と “*The Open Boat*” が同じような性格と価値の水準をもつ



た作品になりおおせたと言えるのである。しかしながら、Crane の作家的価値を左右する、この重要な三つの作品の比較研究は、創作活動の場を中心として考えると同時に、一層綿密な科学的検討を加えることによって、結果的にみた価値の裏付けを行なう必要があることはもちろんであろう。

〈注〉

- (1) Robert W. Stallman (ed.), *Stephen Crane: an Omnibus* (London: William Heineman Ltd., 1954), Introduction, p. XXXVii. The parentheses are mine.
- (2) *Ibid.*, p. 14.
- (3) Edwin H. Cady, *Stephen Crane* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1962), p. 31.
- (4) Stallman, *op. cit.*, p. 5.
- (5) John Berryman, *Stephen Crane* (London: Methuen & Co. Ltd., 1950), p. 141.
- (6) Corwin K. Linson, *My Stephen Crane* (Syracuse Univ. Press, 1958), p. 37.
- (7) Cady, *op. cit.*, pp. 116-117.
- (8) Stallman, *op. cit.*, p. 181.
- (9) *Loc. cit.*
- (10) Cady, *op. cit.*, p. 118.
- (11) Stallman, *op. cit.*, p. 183.
- (12) Berryman, *op. cit.*, p. 78.
- (13) Stallman, *op. cit.*, p. 177.
- (14) おそらく、この表題は Chap. IX の冒頭に用いられている文句 “He wished that he, too, had a wound, a red badge of courage.” から取ったのであろう。この場合、この badge はいわゆる「武勲章」(badge) ではなく、Fleming のうけた moral badge としての the wound of conscience を象徴するものと考えられる。なお、Stallman, xxxi を参照されたい。
- (15) Stallman, *op. cit.*, Introduction, p. xxix.
- (16) Cady, *op. cit.*, p. 52.
- (17) *Ibid.*, p. 56.
- (18) Stallman, *op. cit.*, Introduction, p. xx.
- (19) 1897年1月5日(火)に *Florida Times-Union* に掲載された Captain Murphy の記事や、1月7日(木)付の *New York Press* に出た Crane 自身の報道記事を読む

と、ボートに乗っていたのは明らかに4名であるが、例えば1月4日(月)付で、*New York Press* に掲載された記事では、“Five men came ashore at Daytona this noon — Captain Murphy, Stephen Crane, the novelist, the cook and two sailors. One of the latter, William Higgins of Rhode Island, died soon after reaching land...” というように、明らかに5名いたことになっている。

(X) Stallman, *op. cit.*, p. 475.

(2) Captain Murphy の談話として掲載された1月5日(火)付の *Florida Times-Union* の記事は、遭難者が岸へ泳ぎつくくんだりを、つぎのように描いている。

I (=Captain Murphy) gave one life belt to the steward (=cook) and one to Mr. Crane. The sea upset the boat and washed us all away. I grabbed it and got on the bottom, but she was rolled over again. Higgins tried to swim, but sank. I tried to encourage him, and he made another attempt. The boat went over again, and I saw no more of him until his corpse came up on the beach.